

傲慢という名の過ち：アリストテレス『弁論術』 第2巻1378b23–35における「ヒュブリス」

津上英輔

ヒュブリス (ὑβρις) は捉えにくい概念である。古川晴風の『ギリシャ語辞典』(大学書林、1989年)では「①傲慢無礼、暴虐非道、乱暴狼藉；横暴；思い上り；侮辱；放縦、放埒。②暴力行為、暴行、凌辱、傷害。③被害。④ ὁ,= ὑβριστής。」と定義され、①②を受動の相において見た③、および換喩ないし提喩的表現と見られる④を除き、①と②だけに視野を限っても、精神態度としての「放埒」あるいは自己認識にかかわる「思い上り」から、「傷害」という対人行為までを含み、語義の布置を一元的に把握することが困難であるように見える。この統一像の欠如は、語の「ゼロ・レヴェル」の曖昧につながり、その結果、場合によっては比喩や皮肉をとらえ損なうことにもなりかねない。それゆえ我々としては、まず布置の中心となる語義を見定める必要がある。

本稿は、この概念の基準典拠 (locus classicus) とされるアリストテレス『弁論術』第2巻第2章1378b23–35の論述を厳密に分析することを通じて、ヒュブリス概念に一つの見通しを与えようとするものである¹。その際、『弁論術』やアリストテレスの他の著作におけるこの語の用例との関係は今後の検討に委ね、ここでは、この箇所視野を限って、それがいかなる解釈の可能性を蔵しているかを見極める。基準典拠とは、いわば原点として、座標空間上のあらゆる布置を決定づける権限を有するからである。目指される第一の結論は次のとおりである。すなわち、この「ヒュブリス」は「傲慢」と訳される可能性があり、当該の言動の意味するところを言動者が然るべく見透さなかったことから、相手に恥辱を被らせることに、その不当さがある。そしてもし我々がこの論証に成功するなら、この意味のヒュブリスは、アリストテレスが『詩学』で言う「ハマルティアー(過ち)」に包摂されるという第二の論点が成り立つ。ここから、両概念が互いに照らしあうことで、それぞれが一層明確な輪郭を呈することが期待される。

第1節 テキストと解釈

ヒュブリスの議論は、『弁論術』第2巻第2章で、弁論家が聴き手に喚起すべき情動として第一に取り上げられる「怒り」の吟味の中に現れる。すなわち怒りの原因は「あるものを

明らかに何にも価値しないものと見る考えが現実の姿をとったもの」としての「虚仮にすること (oligōria)」(78b11)にあるが、そうすることが「適切でない」(1378a32)ゆえに、人はその不当さを怒るのである。これを類とし、その下位区分をなす3種として、第一に「何にも価値しないと見る」という意味での「虚仮にすること」、すなわち「軽視 (kataphronēsis)」(78b16-17)、第二に「自分自身にとって何かが[生じる]ようにではなく、[相手である]彼にとって何かが[生じ]ないようにするために、思惑を妨げること」という意味での「虚仮にすること」、すなわち「いやがらせ (epēreasmos)」(78b18-20)に続き、第三にヒュブリスが取り上げられる。現在最も標準的と思われる W. D. Ross 編 OCT 版 (*Aristotelis Ars rhetorica*, Oxford, 1959) では、該当箇所は次のように印刷されている。数字①から⑪は、参照の便のため、意味のまとまりごとに私が付加したものである。

① ἔστι γὰρ ὕβρις τὸ πράττειν καὶ λέγειν ἐφ' οἷς αἰσχύνῃ ἐστι τῷ πάσχοντι, ② μὴ ἵνα τι γίγνηται αὐτῷ ἄλλο ἢ ὃ τι ἐγένετο, ③ ἀλλ' ὅπως ἡσθῇ· ④ οἱ γὰρ ἀντιποιοῦντες οὐχ ὑβρίζουσιν ἀλλὰ τιμωροῦνται. ⑤ αἴτιον δὲ τῆς ἡδονῆς τοῖς ὑβρίζουσιν, ὅτι οἴονται κακῶς δρῶντες αὐτοὶ ὑπερέχειν μᾶλλον ⑥ (διὸ οἱ νέοι καὶ οἱ πλούσιοι ὑβρίζουσι· ὑπερέχειν γὰρ οἴονται ὑβρίζοντες)· ⑦ ὕβρεως δὲ ἀτιμία, ὃ δ' ἀτιμάζων ὀλιγωρεῖ· ⑧ τὸ γὰρ μηδενὸς ἄξιον οὐδεμίαν ἔχει τιμὴν, οὔτε ἀγαθοῦ οὔτε κακοῦ· ⑨ διὸ λέγει ὀργιζόμενος ὁ Ἀχιλλεὺς ⑩ “ἡτίμησεν· ἐλὼν γὰρ ἔχει γέρας αὐτὸς” καὶ ⑪ “ὥς εἴ τιν' ἀτίμητον μετανάστην”, ὥς διὰ ταῦτα ὀργιζόμενος.

この読みのままで、補いを [] で示しつつなるべく逐語的に日本語に訳せば、次のようになる。

①ヒュブリスとは、したり言ったりすること、すなわちそのせいで [したり言ったり] された人に恥となる [ようなことをしたり言ったりする] ことである。②その目的は、生じたこと以外の何かが自分に生じるようにすることではなく、③快を味わうようにすることである。④というの、人が仕返しとして [そのようなことをしたり言ったり] するなら、ヒュブリスしているのではなく、復讐している [ことになる] からである。⑤ヒュブリスする人にとっての快の原因は、害をなしながら、自分ではむしろ優っていると思うことにある。⑥だからこそ、若者と金持ちはヒュブリス者である。というの、彼らはヒュブリスしながら優っていると思っているからである。⑦しかし不敬がヒュブリスにつきものであるが、不敬している人は虚仮にしている。⑧なぜなら、善きにせよ悪きにせよ何にも価値しないものは、何らの敬 [注目] も受けないからである。⑨だからこそ、アキッレウスは怒って言った。⑩「[アガ멤noonは] 不敬した。というの [私の] 分け前を奪って自分で持っているから」。あるいは⑪「[私を、] まるで不敬されたよそ者を、でもあるかのように」。つまりそのせいで [アキッレウスは] 怒っているのだ、という意味である。

ここで問題にするのは 1378b25 すなわち上記②の部分である。そこで、Ross の読みに即

する上の訳を一旦棚上げにして、「その目的は、Xすることではなく」と置くことにしよう。その上で、まずこの段落におけるこの文の文脈的位置を見定めておきたい。①で、ヒュブリスが相手に恥をかかせるものであることが述べられるが、ここではまだ、なぜヒュブリスが類としての「虚仮にすること」の一種であるかは説明されていない。その説明が与えられるのは⑦から⑪までの部分である。すなわちヒュブリスに内包的に含まれる不敬は、対象を、顧慮に値しないものとして蔑にするという意味で「虚仮にしている」のである(⑦⑧)。『イーリアス』からの第一例(⑩)で、アキッレウスが「虚仮にされた」と怒るのは、自分が当然受け取るべき分け前をアガメムノーンが横取りして、(その分け前そのものが惜しいというより、)アキッレウスに当然払うべき敬意を払っていないからである。第二例(⑪)では、由緒正しい武将として敬意を払われて当然のアキッレウスが、よそ者のように敬意を欠いた扱いを受けたがゆえに「虚仮にされた」と怒っている。ここでアキッレウスは実際に何も失っていない。これらの例から一層明らかになるように、ヒュブリスとは、当然の敬意を払わないという意味での「虚仮にすること」であり、それゆえに相手は恥辱を被るのである。以上が、類種関係から見たヒュブリスの内容である。

それに先立って、ヒュブリスの目的が②から⑥までの部分で説明される。それは、仕返しの場合のように正当なのではなく(④)²、不当な目的であるはずだ。それは、Xするためではなく(②)、快を得るためである(③)。快を得るとは、形式上、欲求を満たすことであり³、したいことをすることである。そしてこの場合の快の内容は、実際には相手に害をなしながら、優越感をもつことにある(⑤)。ここでの「害」とは、優越感の他に何か別の危害を加えることなのではなく(なぜなら、そのようなものは全く言及されていない)、優越感をもつこと自体が害なのである⁴。すると、前の段落で見た、ヒュブリスにつきものの「当然の敬意を払わないこと」は、内容的にこの不当な優越感という目的と重なり、不当な優越感の限りでの「害」が「虚仮にすること」の不当さの内容であると考えられる。こうして類種関係と目的から規定されたヒュブリスとは、事実と反して、自分の方が優れていると思いたがために、相手に当然の敬意を払わず、その意味で相手を虚仮にして、恥辱を与えることである。

この中で、ヒュブリスの目的としての「快」とは、(イ)言動の形式的特性としての自己目的性と(ロ)言動の内容的特性としての優越感を契機としている。したがって、その否定態としてのXは、この二契機のどちらかを否定するものでなければならない(②の部分で否定される目的は単一であるから、両契機自体に重なりがない限り、二つの契機がもろとも否定されることはあり得ない)。(イ)自己目的性の否定とは、他の目的への手段たることであり、(ロ)優越感(「優っていると思うこと」(⑤⑥))の否定とは、この場合、実際に相手に優っていることであろう。実際の文に当てはめれば、(イ)「②その目的は、それによって何かを果たそうとすることではなく、③快を味わうようにすることである。」となるか、(ロ)「②その目的は、自分が現実には相手より上位にあるとすることではなく、③快を味わうようにすることである。」となるか、である。

なお、基準典拠に視野を限るという本稿の方針には反するが、この箇所とあまりに密接に関係する同じ章の1379a33-34だけは見ておかなければならない。この関係次第では、我々の箇所の解釈が決定的に左右されることになるからである。そこでは「そのようなもの[ヒュ

ブリスの徴であるもの]とは、必然的に、何かの報いとしてでもなく、行為者の利益になるものでもないものである。」とあり、「何かの報いとして」が、やはり否定対象として④で言及される、「人が仕返しとして[そのようなことをしたり言ったり]する」という部分に対応するのは明らかである。問題は次の「行為者の利益になる」である。これを、前と同様に否定対象同士の好で②と重なりと見れば、②は「利益になるようにすることではなく」という趣旨を述べていることになり、上記(イ)の理解につながる。しかし「行為者の利益になる」ことの否定は、③の「快を味わう」という部分で十分に表わされており、また「徴」として現に「行為者の利益にな」っていないことと、②で問題にされる、未だ果たされていない目的の何たるかが、重なる必要はない。したがって、上で立てたXの(イ)自己目的性か(ロ)優越感かの問題は、1379a33-34の「利益」とは切り離して考えることができる。

さていよいよ、②の検討に入ろう。実はここには、テキストの読みに関して小さな問題がある。上に転載した αὐτῷ は Guilelmus de Moerbeke のラテン語訳 sibi から再構成された読みを Ross が取り上げたものであるが、ギリシャ語諸写本は一致して αὐτῷ を伝えている。ὅτι と分かち書きするのも、Ross の提案であり、(上記 Guilelmus 訳と比較的後年に書写されたいくつかのギリシャ語写本とで、ἡ から ἐγένετο まだが記載されていないのを除くと) 諸写本は ὅτι を伝えている。

まず αὐτῷ (彼自身に)/αὐτῷ (彼に) について言えば、Ross が αὐτῷ を採った意図は明白である。すなわち、少し上の 1378b19 で ἐκείνῳ と対比された αὐτῷ/αὐτῷ をこの箇所と並行関係に置くことを前提とした上で、この語が、主動詞 πράττειν καὶ λέγειν の主語と同一人物を指すと理解するに当たり、αὐτῷ (彼に) では文法的に落ち着いた悪さを覚えたゆえに、もろとも αὐτῷ と改変する必要を感じたからに違いない⁵。ところが、Ross のように厳格に文法規則を適用する考え方と並んで、αὐτῷ のままで「彼[すなわち加害者]自身に」と取る余地も残されている⁶。したがって、写本の記載から離れることなく、この語が指すものとして、加害者、被害者の両方を理解し得る。

ὅτι/ὅτι についても、似たことが言える。大方の資料が伝える ὅτι が、不定代名詞 ὅστις の中性形([生じた] こと)とも、接続詞([生じた] ということ⁷)とも取れるのに対し、Ross の提案する ὅτι は、あえて後者を否定し前者に限定して見せたものである。ここでも我々は編者 Ross の意図を明確に知ることができるが、それに縛られる必要はない。

こうして、我々としては大方の写本通り、αὐτῷ と ὅτι を読むことができ、そこから2対の解釈の組み合わせが得られることになる。すなわち、「加害者に」/「被害者に」と、「[生じた] こと」/「[生じた] ということ」とを掛け合わせた4種である。それを文に当てはめれば、次のようになる。

- (1) 被害者に、生じたこと以外の何かが生じるように、という目的でなく、
 - (2) 被害者に、生じたということ以外の何かが生じるように、という目的でなく、
 - (3) 加害者に、生じたこと以外の何かが生じるように、という目的でなく、
 - (4) 加害者に、生じたということ以外の何かが生じるように、という目的でなく、
- 相手に恥をかかせるようなことをしたり言ったりするという文脈から、少し言葉を補ってわかりやすくすれば、

- (1) 実際に行われた言動以外の何か（他の被害）を被害者に被らせるためでなく、
- (2) 被害者が実際に或る言動を被ったという事実以外の何かを被害者に被らせるためでなく、
- (3) 実際に行われた言動以外の何か（利益）を加害者が得るためでなく、
- (4) 加害者が被害者に或る言動を行なったという事実以外の何かを加害者が得ようという目的でなく、

とまとめられる。

(2)と(4)の場合、何か相手の恥になるようなことをしたり言ったりしたという歴史的・事実的事実は、言ったか言わなかったかという価値中立的なものであるのに対し、被害者が恥を被るとすれば、言動があったという前提に立って、次に来るその言動の内容ゆえであるはずだから、事実と恥とは論理的にねじれの関係にある。また、その「事実以外の何か」が何を指すかが、(1)と(3)の場合ほど明らかでない。このような欠点をもつこの二つの理解は、少なくとも基準典拠に視野を限った場合、採られるべきでない。

(1)と(3)は一見似ているが、(1)の場合、「～ではなく～である」の対立点は被害者の実害と加害者の快楽にあり、(3)の場合、加害者の実益と同じ加害者の快楽にある。言い換えれば、(1)では、相手への悪意からではなく、自分の快のために、ということであり、(3)では、打算からではなく、自分の快のために、ということである。

(3)の場合、打算とは、自分の行為が目的に適っているかを計ることだから、その否定は行為を外的目的の観点から計らないことである。他方、快を目的とするとは、それ自体が目的であることと同値であるから、結局、(3)の理解によれば、ヒュブリスの自己目的性が二重に強調されていることになる。ただし、気をつけなければならないのは、ここで言う「自己」が、相手の恥なのではなく、あくまでも言動そのものであることだ。なぜならば、恥とは、言動の「せいで」①生じるもの、つまり言動の帰結であって、本体ではない。この意味のヒュブリスは、優越感を表わすようなことを、したり言ったりしなくてもいいのに、好んでわざわざして、結果として相手に恥をかかせることである。日本語では、「自重」の反対語としての「横柄」あたりがこれに近い概念だろう。前掲①から⑪までの訳文で、ヒュブリスに「横柄」を代入しても十分意味が通るし、前に文脈の検討から得られた(イ)の意味契機に当たっていて、文脈にも沿うから、この箇所解釈として、これを否定する謂われはない。

それに対して、相手に実害を加えるためではなく、の意味の(1)は、上で(ロ)とした意味契機、すなわち優越感に相当する。なぜなら、相手を害することは、相手に勝ったという意味で、それ自体が自分の現実の優越を示していることになるから、その否定は「現実の優越ではなく」に等しく、「優っていると思うこと」⑤すなわち優越感に等しい。

この場合、何が「悪い」のかと言えば、優越感を内容とするその言動が、相手に恥になることを知るべきであったのに知らなかったことである。もしそれを知っていたのであれば、その言動は悪意から出たことになり、またもし、その言動が相手の恥になることが予知できない、もしくは予知する必要がなかったのであれば、その言動は、仮に結果的に相手が恥をかくことになってとしても、「悪い」のではないことになる。したがって、よく考えれば相手に恥をかかせることになるのがわかるはずの言動を、悪意からではなく、ただそれを言

い・行なって優越感を味わいたいから、言い・行なってしまうこと、これがこの理解に沿ったヒュブリスの意味である。これは「傲慢」と訳されるにふさわしい。これが本稿の提案する基準典拠の新たな理解である。

次に、我々の論点を浮彫にするため、ヒュブリス概念に関する最も代表的な先行研究との異同を明らかにしたい。Fisherは大著 *Hybris* において、本稿で検討している基準典拠に依拠しつつ、ヒュブリス一般を「本質的には他人の名誉への重大な攻撃であり、それが恥を引き起こしがちで、怒りと報復に至りがちである」(p.1)と定義している。言い換えれば、「他人の名誉への重大な攻撃」がヒュブリスの本質、「恥」がその蓋然的結果、「怒りと報復」がその間接的結果ということである。彼はすぐに続けて、「そのような恥辱を加えることの典型的な動機は優越感を表現することの快である」と述べる。

彼の理解の不十分さは以下の三点にある。第一に、基準典拠で読み取られる優越感の不当さが見過ごされている。アリストテレスは⑤で「害をなしながら、自分ではむしろ優っていると思う」と述べているが、対比を表わす比較級「むしろ (μᾶλλον)」という語によって「自分では……と思う」ことと比較される相手(甲よりむしろ乙、あるいは単純化して、甲ではなく乙、における甲)は、〈現実にはそうであること〉以外に考えられない。つまりこの「むしろ」は、〈現実にはそうでないのに〉を意味する。すると、⑤で、この優越感の不当さが「害」と一体に置かれ、ヒュブリスの不当さが優越感の不当さに起因することが示されていると理解されるのだが、Fisherは両者の関係を見ていない。第二に、「攻撃」された相手は、肉体的であれ精神的であれ、まず本体としての実害を被るのであって、それを差し置き、二次的結果としての「恥」だけが①のヒュブリス定義の前面に出されていると考えるのは、いかにも不自然である。第三に、この理解は⑩と⑪の例に合わない。なぜなら、どちらの場合も、アガ멤ノン・アキッレウスは「攻撃」すなわち直接の暴力を加えているのではなく、しかるべき敬意を払っていないだけである。

Fisherと我々の理解の第一の違いは、相手への悪意の有無にある。すなわち、「攻撃」は敵対心すなわち悪意に基づいて相手に害を加えようとするものであるのに対し、「傲慢」には悪意がなく、ひたすら優越感を楽しむことなのであった。無論、自分の傲慢ゆえに相手に恥をかかせることになるのだが、それは故意ならぬ浅慮の結果である。第二に、ヒュブリスの快は、Fisherにおいては「動機」すなわち目的とされ、攻撃はその手段である。つまり攻撃によって相手が害を被ったことから快を受けるのだから、攻撃と快の関係は間接的である。それに対し、我々の理解するヒュブリスの快は、実害を介さず、言動に直接含まれている。第三に、ヒュブリスの不当さは不当な優越感に、言い換えれば自己と他者との関係認識の過誤に起因する。第四に、傲慢が指しているのは精神の態度であって、攻撃のように、対人行為として外化したものではない。たしかにヒュブリスは「現実の姿をとったもの」であるのだが、「傲慢」はその個別的な相面にではなく、本体の方に焦点を当てる概念である。言い換えれば、「傲慢」は多様な姿をとり得る。この理解は⑩と⑪の例だけでなく、『弁論術』第2巻第2章の後続箇所では挙げられるヒュブリスの様々な形態を包摂し得る。最初にあげた辞書の多様な語義も、この多様な姿として理解できるであろう⁸。これが、最初にヒュブリス概念の「一つの見通し」と言ったものである。

第2節 過ちとしての傲慢

我々はヒュブリスを、悪意なく、浅慮ゆえに結果的に悪しき事態を招くこととしての「傲慢」と解し得ることを見てきた。するとこれは、『詩学』の hamartia とびたりと重なる——これが第一の論点を踏まえた、本稿の第二の論点である⁹。そこでまず、『詩学』におけるハマルティアーについて最低限の確認をしておこう¹⁰。悲劇とは、人がハマルティアーゆえに没落する様を、蓋然的または必然的過程として示すべきものであるが、我々の理解によれば、ハマルティアーとは、悪意ゆえではなく、当然なすべき結果予測を怠ったゆえの加害行為であり、「過ち」と訳されるにふさわしい。すると、ヒュブリスは我々の理解の中で、まさに過ちの一種に相当する。アリストテレスの言葉もそれを支持している。すなわち、ヒュブリスが「そのせいで (ἐφ' οἷς)」(①)相手に恥をかかせるものである一方、悲劇におけるハマルティアーとは、そこから「これゆえにこれ (τάδε διὰ τάδε)」(『詩学』第10章 1452a21) という形で事件が展開するものとされ、両者は悪しき結果を引き起こす原因という限りで等しい。

さて、ヒュブリスとハマルティアーの関係については、先人たちがすでに議論を重ねている。それを広く踏まえることは、ここで可能とも必要とも思われないので、2つだけを取り上げ、問題点の所在を見極めることにしよう。

Fisher はアリストテレスにおけるヒュブリスについて考察する前掲書第1章の最後で、彼の理解する「攻撃」としてのヒュブリスが、アリストテレスの悲劇論の中に定位されるかを問い、「我々はヒュブリス行為がハマルティアーの典型的な、あるいは可能な事例たり得るかを問わなければならない」と述べる¹¹。そして彼は、二大ハマルティアー理解のうち(我々と同様に)「事実誤認 (mistake of fact)」説に立つ限り、これとヒュブリスを関係づける余地はないとする。他方、道徳的欠点説に立つと、何かのはずみで他人攻撃の誘惑に乗ってしまうヒュブリス行為はハマルティアーに当てはまるかもしれないが、同様の原因なら他にいくらでも考えられるとし、結局「悲劇の登場人物が陥りがちなハマルティアーの類型をアリストテレスが考えるときに、ヒュブリスが真っ先に念頭に浮かぶなどということは、到底ありそうにない」と結論づける。

四日谷敬子は論文「ヒュブリスとハマルティア——アリストテレス『詩学』の悲劇論に寄せて」において、「なぜアリストテレスは、悲劇的行為を特徴づけるために、ホメロス以来のヒュブリスという語を用いずに、ハマルティアという語を用いたのか」(強調四日谷)という問いに立ち向かう¹²。彼女は『ニーコマコス倫理学』に依拠しながら『弁論術』の基準典拠も視野に入れて、アリストテレスの「ヒュブリス」を「驕慢」と訳した上で、「ひとを侮辱して喜ぶというように、『快楽を伴う』不正」とまとめている。他方、「過失」つまりハマルティアーについて、「悲劇的人物は、自覚的に悪を為すひとではなく、情念の過超によって中庸を逸したひとであり、これがつまりは過失」と述べる。すると、「ヒュブリスは、彼〔アリストテレス〕の概念整理にしたがえば、随意的な不正の一つであり、それゆえに

こそ悲劇的人物には帰せられない」ことになる。

このように、二人の論者はヒュブリスをハマルティアーの一種と見ることに否定的であるが、その否定が二人のヒュブリス理解に起因することは明らかである。すなわちヒュブリスを「攻撃」と見る Fisher の場合、それを「過ち」と見ようと試みれば、攻撃のしかたではなく相手を攻撃したということが過ちだったと考えるほかない。しかるにその過ちは相手を攻撃すべしという判断にあるのであって、攻撃という行為そのものにあるのではない。彼が「攻撃」と「過ち」とを関係づけ得なかった理由はここにある。彼は優越感の快を攻撃の「動機」としながらも、その優越感が過っていること（前節の「むしろ」(⑤)の解釈を参照）と結果としての相手の恥との因果関係を見逃し、ヒュブリスを「攻撃」行為に限定して理解しているために、そこに含まれる過ちの契機を見抜くことができなかった。四日谷の場合、主として依拠する『ニーコマコス倫理学』が我々の視野の外にあることが、ヒュブリス理解の隔たりを招いている。最大の違いは、快の内容が優越感にあるか否かである。すなわち、言動によって快を得ようとする決断は、なるほど彼女が述べるように「随意的」であるが、我々の理解する基準典拠の論述によれば、その快は「ひとを侮辱して喜ぶ」行為を内容としておらず、したがって、その結果相手が恥をかくことは意図されていない。

我々の理解はこうである。ヒュブリスとは、自分が相手より優っているという判断を公表することで快を得ようと思い、そうすれば相手に恥をかかせることになるという結果を予測できたのにそうしないことの過ち、である。ここには二重の過ちが含まれている。第一に、自分が他人に優越しているという過った自己認識であり、第二に、結果を予測し過つこと、すなわち、いま行なおうとしている言動がいかなる結果を引き起こすであろうかを、しるべきように次々と因果的推理を迫るのを怠った過ちである。この2つは、後者が前者を前提としているのは確かだが（自己認識が過っていないければ、つまり実際に自分が優越しているなら、相手は恥をかかないのだから、結果を予測する必要もない）、別個のものである。過った自己認識を抱きながら、慎重に結果を予測して言動を自重することもあるし、自己認識が正しいからと言って、自分の行為の結果を常に予測できるとは限らない。

このように傲慢としてのヒュブリスは、自己と他者との関係、および自己の行為と世界との関係における、二重の見過ちに存する。過ちの中の過ち、それがヒュブリスである。

第3節 『オイディプース王』における傲慢と過ち

我々は前節で、『弁論術』におけるヒュブリスの議論と『詩学』の悲劇論におけるハマルティアーの議論が接続可能であることを主張した。本節では、解釈を実際の悲劇作品にあてはめて、主張を検証することにしよう。取り上げるのは、アリストテレスが自身の悲劇理論に最も適っていると考えたソフォクレスの『オイディプース王』である。ただし、予め二つのことを断わっておかなければならない。第一に、この検討から期待されるのは、悲劇一般の説明原理としてのヒュブリスの有効性の実証ではなく、『弁論術』の基準典拠の我々による理解と『詩学』におけるアリストテレスの悲劇観との適合性の確認という、きわめ

て限定されたものでしかない。言うなれば、計算における検算、あるいは定理の練習問題のようなものである。ただ敢えて言うなら、これによって、基準典拠におけるヒュブリスを「傲慢」と、またハマルティアーを無知ゆえの「過ち」と理解することの生産性を主張することはできるようになるだろう。第二に、この作品におけるヒュブリスの問題にはすでに多くの論者が関心を寄せている¹³。そしてオイディプースの行為をヒュブリスと見るなら、それは「過ち」として、身の破滅を招く原因ととらえられることにもなるだろうから、この作品に関してヒュブリスと「過ち」を同一視するという我々の論点は、それ自体としては少しも新しいものではない。

さて、この悲劇で主人公はさまざまな過ちを犯している。そして劇行為のすべてがヒュブリスに関係すると言っても過言ではない。まず疫病の原因探索から始めて、先王殺害の犯人探しに至る部分は、自分の知力についての過ぎた自負に突き動かされたものである。無論これは王としての義務感から出たものでもある。しかし「好んで、つまり強制されたわけでもないのに (ἐκόντα καὶ ἄκοντα)」(1230 行) という使者の言葉は、直接にはイオカステの自死とオイディプースの自虐行為にかかわるが、ここには、これに至る彼の全行為が含意されていると考えられる。すると彼は、しなくてもいい探索を、わざわざ好んで行なったことになる。好んですること、それは快の謂いである。また、彼にはそもそも、王としてその探索を行なう資格などなかったのである。これらの行為は、少しの悪意もなく、しかし結果として、人に大きな恥辱を与えている。アイロニカルにも、その「人」とはオイディプース自身に他ならないのだが。

予言者テイレスシアースについてはどうであろうか。オイディプースは彼に厳しく問いたてる際、「悪者の中の悪者」(334 行) とまで言い、明らかに侮辱している。しかもこの詮議は「徒 (ἄλλως)」(333 行) であって、ことの必要からではなく、王自ら好んでしていることである。しかしこれは、我々のヒュブリス理解には合わない。なぜなら、彼は悪意をもって予言者を侮辱しているからである。むしろ、真相を知らない王に対して、自分は知っているという優越感をあからさまにする予言者のほうが、結果として王に恥辱を与えている。また、そこに悪意はない。しかし彼は真理を語っているのであって、優越感は過っていない。それゆえ、彼は我々の理解するヒュブリスに陥っていない。そして彼の語る真理とは、王の本当の姿に他ならないのだから、結局彼は、オイディプースが自らの姿を照らしだす鏡として働いている。王は予言者を疑い、侮辱して、口を割らせれば割らせるだけ、そうとは知らずにこの鏡を磨く。そしてその鏡は、疑い (疑われ)、侮辱する (侮辱される) 醜い自分の姿をますますはっきりと映し出しているだけでなく、相手を愚弄すればするだけ、それが自分の姿であることに気づかない自分の愚かさを露呈してもいるのである。ということは、予言者に対する侮辱は、そこに含まれる悪意の部分だけを残して、すべて傲慢として王自身に返って来るのである。そもそも、自分が誰かを知らないこと以上の過ちがあるだろうか。

クレオンについてもほぼ同じことが言える。すなわち、予言者ならざる彼は、オイディプースについての真相を知っているわけではないが、王が自分にかけての嫌疑については真相を知っているだけ、やはり真理の鏡である。王が彼にかける疑いや侮辱の言葉は、そのまま王自身に跳ね返る。ただし、すべてを知った王自身が、「さきほどの彼への振舞いについて、

すべて私が悪い (κακός) ことがわかった」(1421 行) と漏らすとき、王弟に向けられた悪意だけは自分の身に返っていないことを示している。

このように、オイディプースの行為は、悪意を除き、すべて反転して彼自身に向かう。するとむしろこう言うべきかもしれない。オイディプースが、自分の言動の意味を知らずに(過って)、したがって批難の向かう(本当の)先(である自分)への悪意なく、自分のしたいように(快を求めて)した言動の一切がヒュブリスなのであると。そしてその無知の過ちが世界の中でもつ意味を、死にもまさる恥辱として開示するこの劇の全体がヒュブリスの物語なのであると。

こうして、『オイディプース王』におけるヒュブリスとハマルティアの重なり合いが確かめられた。ここから、この作品を典型的悲劇と見なし、また悲劇をハマルティアからの因果連鎖の提示と説明するアリストテレースの思想に、我々のヒュブリス理解が適合することが明らかになった。逆からたどれば、我々のヒュブリス理解が、アリストテレースのハマルティア論の有効性を証することにもなった。これはそのまま、我々のヒュブリス理解の有効性でもある。それを際立たせるため、若干の先行研究との比較対照を試みよう。

まず、先述のとおり、ヒュブリスを「他人の名誉への重大な攻撃」と見る Fisher にとって、オイディプースその人を含めて、この劇にはヒュブリスを犯している人物はいない¹⁴。この見解は、第2スタシモン第1アンチストロフェー第1行(873行)に2度出現するヒュブリスの語が、劇行為と直接の関係を有さず、「本質的に罪のない男が不明確に最大の恐怖に見舞われる」という世界観を表わすものであるという驚くべき結論につながる¹⁵。アリストテレース悲劇論との一致については下でまとめて検討するとして、緊迫を増す劇行為のただ中で、コロスがあえて強調する言葉を、どの位置に置いてもさして効果が変わるとは思えない一般的世界観の表明と取るのが、生産的な作品理解と言えるだろうか。この不毛さはすべて、彼の基準典拠理解の不十分さに起因している。

次に、Armstrong と Peterson の共論を見よう。二人は『詩学』第13章における理想的悲劇主人公の規定を「修辭的均衡」すなわち語配列の観点から分析し、付け足しでない「大なる幸運と名声」の部分のアリストテレースの初期断片と並行関係に置いて検討した結果、「大なる幸運と名声を有するが十分な徳ないし正義を有しない男が、不可避免的に精神的欠点すなわち ἀμαρτία (= ἄνοια [無分別]) に陥りやすく、その欠点が最終的には彼の不幸への転落を引き起こす」と結論づける¹⁶。この意味のハマルティアはヒュブリスと極めて近い関係にある。現に二人は『オイディプース王』について「ἀμαρτία は彼の無知という姿だけでなく、自分の探索能力についての自信過剰 (over-confidence) ならびにテイレシアースとクレオンへの王侯的傲慢 (princely arrogance) という姿もとっている。」(p.70) と述べ、実質的にヒュブリスとハマルティアがこの作品で重なり合うという理解を示している。

これは傾聴に値するハマルティア解釈ではある。そしてなるほど、二人の言う「無分別」という「精神的欠点」は、心のありようとして、「無知」という個々の「過ち」と、するどく対立するかに見える。しかしヒュブリスを主題とする本稿に必要な限りで言えば、この対立は見かけほど大きくない。なぜなら、無分別とは知恵を正しく使わないことであり、その結果が無知だからである。結局、彼らの結論は我々と遠くないと言ってよいだろう。ただ、

ヒュブリスを主題としない二人は、たびたびこの語に言及しながらも、基準典拠には触れておらず、また、ヒュブリスがハマルティアーの一つであると明言しているわけでもない。我々の解釈は両概念の重なりを根拠づけることによって、アリストテレスのヒュブリス論とハマルティアー論の射程を確保することになる。

最後に検討する先行研究は、我々のヒュブリス理解に最も近いと思われる Janssens の解釈である。彼は『オイディプース王あるいは知性の罪』と題する原文付き注釈小冊子で、「ヒュブリス者はつねに傲慢の罪を犯す (Ὁὕβριστής pêche toujours par orgueil)」。しかし理性からの養分で育ち、知性を運命神の理不尽な力に対立させるこの傲慢は、どこまでがギリシャ人の、どこまでが我々の、どこまでが人間一般のものなのだろうか」と述べる¹⁷。彼がここに言うヒュブリスが、オイディプースを「無分別な行動へ押しやる」ような「文字通り論理に酔っている」(p.105) 状態としての「知性の罪」であるとするなら、そこに悪意はなく、また、知性が「運命神に対立」している状態とは、自己の行為判断と世界とのつながりが断たれている状態に他ならないから、このヒュブリスはまさに我々の言う「傲慢」を意味する。また、ヒュブリスと「罪」を結びつける注釈者の理解は、「罪」と「過ち」の違いだけを残して我々の理解と一致する (p.4)。

このように、Janssens の解釈は我々のそれに近い。ただ、基本的な世界理解に違いがある。すなわち、彼が「知性の罪」と呼ぶ、自分の知性への過信は、「運命神の理不尽な力」に抗することを内容とし、しかしそれは必ず失敗するよう運命づけられているとすれば、結局人は運命に従わざるを得ないことになる。これはすなわち、世界を運命という不可知なものと同一視することである¹⁸。前頁で見た Fisher の世界観も運命論的である。我々の理解するアリストテレスの世界観はそれとは違い、悲劇で提示される世界とは、基本的に理解可能と考える。理解可能であればこそ、「過ち」があり得るのである。このような両者の世界観の違いは、片や宗教的な意味の「罪」、片や現実世界の規範からの逸脱という意味の「過ち」という、言葉づかいにも表われている。定式化によって違いをさらに鮮明にするなら、Janssens の言う「罪」の対立項が、知性を過信しないこととしての慎みであるはずなのに対して、我々の理解するアリストテレスの言う「過ち」の対立項は、一層知性を働かせることとしての深慮である。

結

我々は第1節で、基準典拠における「ヒュブリス」が「傲慢」を意味し得ること、第2節で、それが悲劇のハマルティアー(過ち)と概念的に重なることを見た。そして第3節では、その重なりをいわば事実問題として確認した。すると、ハマルティアーの一形態にヒュブリスという明確な形を与えることで、アリストテレスのハマルティアー論が補強され、また、アリストテレス思想の内部で、ハマルティアーとしてのヒュブリスを悲劇理解の道具として確保する道が開かれたと言ってよい。稿を結ぶにあたり、最後の点をもう少し見届けておきたい。

我々はいったい、過ちを避けることができるのだろうか。もちろん、なす術もなく運命に身を任せるほかないという決定論を、アリストテレースは「汚れた」ものとして、理想的悲劇から退ける。過ちは行為者の浅慮にあるのだから、思慮深くありさえすれば、その過ちは避け得たはずである——我々の理解するアリストテレースは、悲劇の筋をそう説明する。悲劇は過ちが蓋然的または必然的にいかなる結果をもたらすかを示すべきとされるのだから、人は悲劇を見て過ちの避け方を学ぶとも言える。

しかしここで、アリストテレースから離れて考えるなら、神ならざる者は未来のすべてを予知することができない。それと同様、全知ならざる者は、自分の言動が世界においてもつ意味のすべてを知り尽くすことはない。したがって、我々は自分の自発的言動が相手にとって、何らかの意味で不敬に当たらないか、常に不明の状態に置かれている。極言すれば、我々はいつ何時、どんな恥辱を他人に被らせ（てい）るかもしれないのである。その恥辱は怒りを生み、復讐を誘発するだろう。傲慢は万人の、常住の問題である。この避けがたさこそ、神ならざる人間にはとらえ尽くすことのできない世界の意味であり、かつ人間存在の悲劇性なのではないだろうか。

本稿は科学研究費補助金（平成 16 ～ 19 年度、基盤研究(C)、「アリストテレース『詩学』と『弁論術』の比較に基づく新たな芸術存在論の構築」）による研究成果の一部である。

注

- 1 N.R.E. Fisher は、ここでのアリストテレースの定義が「概念全体の最良の説明」であると述べている (*Hybris: A Study in the Values of Honour and Shame in Ancient Greece*, Warminster, England: Aris & Phillips, 1992, p.7)。今後単に基準典拠と言え、この箇所を指すものとする。なお、本稿では、ギリシャ語そのものを論じる場合と引用の場合を除き、ギリシャ語を適宜カタカナ書きまたはローマ字表記で表わす。また、本稿の日本語訳は、すべて私のものである。
- 2 復讐の正当さについては、例えば『弁論術』第1巻第12章 1372b4 から知られる。
- 3 『靈魂論』414b5-6:「欲望とは快を (τοῦ ἡδέος) 求めることである」。
- 4 κακῶς δρῶντες の分詞を手段の意味に取って、「相手を害することによって優越感を覚える」という理解も、文法上は可能であり、現にそう取る注釈者、翻訳者もいる。しかしこの理解は、すぐ次の例(⑥)に合わない。すなわち、金持ちは別としても(?)、若者が一般に他人を害して喜ぶという残忍な傾向をもっているとは考えられない。仮に若者が粗暴なふるまいに及びがちだとしても、それは相手を懲らしめて優越感を覚えるためというより、激情のあまりであることのほうが多いだろう。
- 5 Rudolf Kassel のエディション (*Aristotelis Ars rhetorica*, Berlin and New York: Walter de Gruyter, 1976) では、写本の記載の分かれる b19 については αὐτῷ を読み、b25 (=我々の②) については大方の写本通り αὐτῷ を読んでいる。Ross の改変を支持する Grimaldi (William M. A. Grimaldi, *Aristotle, Rhetoric II: A Commentary*, New York: Fordham University Press, 1988, p.30) は、Kassel のこの判断を疑問視するが、Kassel は b19 と b25 との並行関係を見ていないのであり、その判断は十分可能である。
- 6 たとえば Cope (Edward Meredith Cope, *The Rhetoric of Aristotle*, Cambridge, 1877, Vol.2, p.17) は αὐτῷ と読んだ上で、注釈でそれを the aggressor と言い換えている。Grimaldi (*Aristotle, Rhetoric I: A Commentary*, New York: Fordham University Press, 1980, p.96) によれば、指示代名詞 αὐτοῦ と再帰代名詞 αὐτοῦ は『弁論術』第1巻全体で互換可能である。

- 7 Grimaldi. ad loc. は「[生じた] ゆえに」と取っているが、空席となった ἐγένετο の主語として、直前の主語 τὸ... ἄλλο (他の何か) 以外のもの (たとえば、「何か或ること」) を理解するのは苦しいのではないかと思う。
- 8 *Historisches Wörterbuch der Philosophie* において、ギリシャ語ヒュブリスは「人間の節度を踏み越えようとする傲慢な越権に向かう態度および具体的にそのような越権の個々の諸形態」(R. Rieks 執筆、1974 年) と定義されている。これは本体とその具体相を分けて考える我々の方向と一致すると見てよいだろう。
- 9 以下、hamartia を「過ち」の意味で用いるときは「過ち」と、それ以外の意味または未決状態の場合はハマルティアーと表記する。ただし引用の場合はこの限りではない。
- 10 これについては、津上英輔「『大きな過ち』：アリストテレス『詩学』第 13 章における悲劇性」(2001 年 3 月 成城大学大学院文学研究科『美学美術史論集』13、75-92 頁) で主題的に論じた。
- 11 Fisher, op. cit., p.33. 彼はここで、かなり多くの先行研究を踏まえている。
- 12 『京都大学総合人間学部紀要』第 5 巻 (1998 年)、1-15 頁。
- 13 Maurice Dirat, *L'hybris dans la tragédie grecque*, Université de Lille III, 1973, pp.318, 714 参照。
- 14 Fisher, op. cit., pp.341-342. 彼はテイレスアースとクレオーンに対するオイディプースの悪口を取り上げることもできたかもしれないが、瑣末と判断したのだろう。
- 15 Dirat (op. cit., pp.317-338) も同様の考えを示している。
- 16 David Armstrong and Charles W. Peterson, "Rhetorical Balance in Aristotle's Definition of the Tragic Agent: Poetics 13" *The Classical Quarterly*, Vol. xxx, 1980, pp.62-71. 引用文は p.68.
- 17 *Edipe-Roi ou Le Pêché d'Intelligence*: texte de Sophocle, commenté par Emile Janssens, Namur: Wesmael-Charlier, 1953, p.4.
- 18 Kitto の見解も、基本的に同じであると考えられる (H. D. F. Kitto, *Greek Tragedy: A Literary Study*, 3rd ed., London: Methuen, 1961, pp.185-186).

A *Hamartia* Named Insolence: *Hybris* in Aristotle's *Rhetoric* 2, 1378b23–35.

TSUGAMI Eske

Aristotle gives a full definition of *hybris* in *Rhetoric* 2, 1378b23–35, the *locus classicus* of the concept. It is 'to do or say that which disgraces the victim, not in order to do *X*, but to have pleasure' (78b25). Close textual, grammatical, and contextual scrutiny of this passage shows that 'do him harm' is the most appropriate sense for *X*. As a consequence, *hybris* here is best translated as insolence, i.e. disrespect without ill will. Since insolence is caused by an error in recognizing one's relation to the other person and the effect of one's action on the other, it is a sort of *hamartia*, an error in decision-making which Aristotle in his *Poetics* 13 says results in the downfall of the tragic hero.

This understanding of *hybris* can be confirmed by examining Sophocle's *Oedipus*, in which the King places too much confidence in his intelligence. And all the suspicions and insults Oedipus unjustly casts on Teiresias and Creon ironically prove to be directed at himself, only leaving over the ill will he showed toward them in the original utterances. Seeing such *hybris* causes the hero's ruin, *hybris* is the main *hamartia* in this tragedy.